

目次

湿地	5
啼 <sup>な</sup> けない晨 <sup>しん</sup> 鶏 <sup>けい</sup>	23
此岸	39
家郷	53
エンジェル・フィッシュの家	69
待ち針	109
蛸 <sup>たこ</sup> の死	151
三日月	161
他人の夏	221
ホオジロ	279

# 湿地

山陰の雪は都会の雪よりも重い。鉛色の空は低く、濁色の海との境界はけぶるようにしてはつきりしない。列車は海まで押しせまっている岸壁の上を走った。小さな家々は海岸と山とのわずかな土地にしがみつくように点在している。列車は蛇行しながら短かいトンネルをいくつも進んでいた。

ほくはけだるい体を起こして、ほんやりと海を見ていた。

「龍彦さん？ 龍彦さんじゃないの」かん高い声が通路から届いた。「やっぱり、龍彦さんだ」視線を合わせると、女の顔がそばにあった。

「覚えてる？」大柄な女が人なつこい顔を向けていた。「淑子よ。あなたのうちの近くの」ほくは思い出したくなかった。だが記憶は蘇った。それでもしばらく赤い頬をしている女を見つめた。

「野口さんのところの」

女はその言葉を聞いて、ほくの隣りの座席に腰をおろした。

「あなたのことは忘れないわ」

おしゃべり女は気をつかうなどということを知らない。昔もでしゃばりだった。

「一時は大変なうわさになったんだから」

やはり帰ってきたのは間違いだっただのか。「小さな町でしょ」女は言った。胃袋が音を立てるようにして縮んだ。

「映子さんはあれからも田舎にいるわよ。きつとびっくりするんじゃないかしら」

女はそれがぼくに対するもてなしと思ったのか、あるいはそのことだけしか印象にないのか陽気に伝えた。母の話では映子は町にいないはずだった。

母がぼくの顔を見て戸惑った。

「どうして嘘をついていたの」

陽に灼けて、浅黒く変色している母の顔が一瞬こわばった。沈黙だ。いつもの彼女の答だ。

「なんとも思っていないから。子供の頃のことじゃないか」わかりきっている答を訊くつもりは、ぼくにはない。「もう東京には行かない。どこにいても同じだから」ぼくは再び母の動揺する顔を見ながら言った。

山陰の天気は気まぐれだ。雪は思い出したように降っては、また止んだ。田舎の一日は時間が停止したようだ。起きていても頭の中は朦朧としている。酒びんを灰皿代りに煙草を吸った。吐き出した煙はゆっくりと天井板まで登り、舐めるように流れた。酔いのため、弛緩していた筋肉が、時折わけもなく小刻みに踊り出した。

ながい溜息で天井から沈んでくる白煙を押しよけた。再び蒲団の中にくるまりながら、低く、呻いた。「部屋の中にはかりいたら、おかしくなってしまうわよ」

六十近くになる母はまだ老いを知らない。ぼくが故意にそう見ているからかもしれない。時々、知り合いの誘いで、お茶を飲む。その誘いもぼくが帰ってきてからは出かけない。こちらに感情を合わせたいのだ。父が生きていた時もそうだった。ただ対象が息子に代っただけだ。

「お父さんにそっくりやね」

彼女は部屋に入ってきては、窓を開け空気を入れ代えた。

「どこか悪いんじゃないの？」

野良仕事で節くれだった指をほくの額にあてがった。「だんだんと親父に似てきたんじゃないの」父は強度のうつ病だった。雪の降っている日に、何時間も縁側に座っていた。今でもあの気味の悪さを思い出す。

「そんなことはない。あなたはわたしの子供だから」母はすぐに打ち消すように言った。

「でも半分は入っている」

ぼくは突き放すように言った。彼女はまた黙った。

「大丈夫だよ。なんでもないんだから」

どこにいても同じことだった。田舎に帰ってみると、少しは安堵できると思ったのは間違いだった。

「役所に欠員があるそうだけど、どうかい」

母はぼくが家にいることに安心して温和な声で尋ねる。

「お願いしたらいいと思うけど」

「まだ働く気にはなれないよ」

母は淋しい目つきでぼくを見つめた。

「今にちゃんとするから」どうせ諦念と失望の間を振り子のように行き来するだけだ。「ウォー」とぼくは蒲団をかぶり咆哮した。無気力が体中を支配していた。都会でもそうだったのだ。「毎日、寝てばかりいるんじゃない」母の声が階下からした。「きっと、都会で疲れたんじゃない」女の声がした。

縁側の木に時折野鳥がきた。ぼくは父が使っていた古い空気銃で撃った。バンという破裂音と同時に、

野鳥は落下し雪の上で羽をばたつかせている。毛をむしり、湯をわかし、うぶ毛を抜き、はらわたを取り、火にあぶって食う。バリバリと骨の音と一緒に酒を胃袋の中に流し込んだ。「そんな気色悪いことはやめなさいよ」母は顔をしかめる。「親父もやっていたんだから、いいじゃないか」今さらとやかく言われても、手遅れというものだ。母もそう感じているのか。酒がなくなるとそろえている。何も変ってはいない。ぼくの待遇が父親に昇格しただけだ。

「わたしにも食べさせてくれる？」

痩せた小柄な少女が弱いまなざしを向けて訊いた。「食べれないよ、きつと」ぼくは心がなごむのを覚えながら、「罰が当たるよ」とからかった。

「罰が当たってもいいの。どうせ死んでしまうんだから」

「どうして？」

「体が弱い。だから」

少女は血のついた羽を一枚一枚、焚き火の中に投げながら、「手伝っているから、食べさせてね」と言った。か細い手が痛々しく、少し手を加えるだけで折れそうだった。

少女は十一歳だった。小刀で竹を切り、鳥の尻の穴から刺して、砂糖醬油を垂らして焼いた。はらわたは彼女がかわいそうだと行って、土に埋めた。ぼくは低く笑った。「にがい」少女は野鳥の足をひき裂いて口にした。前歯で骨をちぎり、しつこいほど噛んだ。

「内緒だぞ」

ぼくは彼女に酒を少し注いだ。

「おいしい」

「おいしい?」

「うん」

ほくは喜んだ。以前にもこんなことがあった気がした。父とぼくだ。

「お兄ちゃんは罰が当たってもいいの」

少女は頬を上気させて言った。生ぐさい臭気があたりを覆っていた。「罰が当たって死にたいよ」竹がパ  
アーンと破裂音を上げてくれた。少女の表情が強張った。「お兄ちゃんも死にたいの? わたしはね、  
もうすぐ死ぬ。死ぬとみんなが喜ぶんだ。いっぱい保険をかけてあるの。だから早く死んだほうがいい  
の」少女が帰ると母親が金切声を上げてやってきた。

「どういうことですか」

少女は心臓病だった。「まったくお宅の人は何をやるかわかったもんじゃなく」髪を乱した女は叫んだ。  
「今度こんなことをしたら、責任を取ってもらいますからね」母は怯えていた。

「どうしてお酒なんか飲ませたのよ」

「やってしまったことはしかたがない」

「お父さんのこともあるんだから」

遠くで少女が大声で泣いている声が聞えた。「ほら、またいじめられているじゃないか。わたしはあれ  
がつかいのよ」母は泣き声が止むまでうなだれていた。

酒灼けで顔が赤黒く変色している男が、玄関の戸を力任せに開いた。

「娘を殺す気か」

男は充血した目で母をにらみつけた。それからぼくを見据えた。

「なんとか言ったらどうだ」

男は胸ぐらをつかんだ。

「知らなかったんじゃ。龍彦は病気だと知らなかったんじゃ」

母は男の手をはずそうとした。次の瞬間、彼女の体が跳ねた。

「黙つとれ。おれはこいつに用事があるんじゃ」

熱い感情が急激にぼくを襲い、男を殴った。にぶい音がした。「龍彦」母の声があった。だが遅かった。ぼくは相手の頬をもう一度殴った。男は土間に転げ落ちて低い声を上げた。

「龍彦。早く逃げるんだ」母が大声を上げた。何も逃げることはない。ぼくは殴ってしまったと怒りは再びこなかった。奇妙に体が浮わつき、ほっとした。そのまま二階に上ろうとすると、「龍彦」と母の悲鳴のような声があった。後頭部に痛みが走った。振り向くと、男が薪を持って突っ立っていた。

後頭部に手を当てるとべつとりと血がついていた。螢光燈が覆いかぶさり、黒く消えた。視界がはつきりしてくると、青ざめている男が「かっとしてしまったんだ」と言った。

「とんだことをやっちゃまった。まったく、おれは駄目だ。酒を飲むとわからなくなっちゃうんだ」相手はしきりに弁解した。ぼくは嬉しくなり笑った。男も安堵したのか、ぎこちない表情を見せた。

五針縫ったが異常はなかった。「馬鹿にならなくてよかったね」少女は部屋にきて遊んだ。「お兄ちゃんも保険をかけておいたほうがいいよ。おばあちゃんが喜ぶから」彼女は愉しそうに言った。

町は想像もつかないほど変っていた。町を囲んでいた山々は削れ、合板で造られた家が建っていた。川はよどみ、上流に化学工場ができたらしい。「あの工場ができてから、若い人が帰ってきた」と母は喜んだ。

雪は降り続けている。白い田の上には海猫が舞い、ひっきりなしに鳴いた。枯木にはカラスが止まり、海猫の泣き声を聞いていた。ぼくは医院まであぜ道を歩き、時々、田の上を歩いている海猫に石を投げた。海猫はうらめしそうに鳴いた。

左官をやっている男は、仕事が終わると酒をかかえて家に来た。大声で笑い、酒を水のように飲む。飲むと泣いた。「おれの家なんか、時限爆弾をかかえて生きているようなもんだ。娘がよくなるなら、田なんかみんな売ってもいい」男は涙を流して同じことをくり返した。「代れるものなら、代つてやりたいよ。あの娘は不幸な奴だ」男の酒は葉だ。不安を打ち消すために酒を飲んでいる。「飲まない時は働き者でいい人なのに。もしかたがないからね」母は憐むように言った。

「お兄ちゃん。また小鳥を殺していると罰が当たるよ」

少女は家を出てきてはぼくの相手をした。

「あまり出歩くとまたしかられるぞ」

ぼくは脅した。

「お父さんがお兄ちゃんならいいって言った。もうわたしはお酒も飲まないし。小鳥も食べない。罰が当たると死ぬから」

ぼくはようやく動き出した。裏山に登って鳥を撃ち、男はそれを食べた。ぼくは自分が快活になってい

くのを感した。「昔のようだね」母はよく笑うようになった。「そろそろ仕事をしようかな」ほくが応じると、母は珍しく猪口をさし出した。「和ばば一人じゃ、かわいそうで。田舎にいるのが一番の孝行じゃ」男は陽気に言う。「娘の調子がいいんだ」男の歌は続いた。

ほくが女と出会ったのは、二月も過ぎた頃だった。

「そのうち会うと思っていた。小さな町だから」

ほくは言った。

「変わらないわね。昔のまま」

体にまるみをおびた女はほくをおそろおそろ見つめた。やせて頬骨の高いウエイトレスが無愛想に注文を訊いた。「町も喫茶店がたけのこのようにできたわ」女はサーモンピンクのマニキュアの指をいじった。「時間が経つのは早いわ」短い会話が思い出したようにとびかい、継続しない。以前のような息苦しさも、胸をかきむしりたいほどの痛みも襲ってこない。飲み物を落したウエイトレスが悲鳴を上げた。女はかすかに白い歯を見せた。「大人しくなったね」とこちらが言うと、女は目尻に小皺を走らせた。

十八歳だった。大人だと思っていた。雨が降っていた。女は白い息を吐きながら走ってきた。後悔しないと約束した。ほくは不安をはねのけて列車に乗った。

南禅寺のそばに部屋を借りた。女は会計事務所の事務員をやった。田舎を捨てることはわけないことだと思えた。女は田舎のことは何も言わなかった。沈黙が続くと肉体をからませた。働けばなんとかなると考えていた。やがて彼女は妊娠し産むと言った。金がいると思つた。ほくは町工場が終ると四条の喫茶店で働いた。きつとあなたを偉くしてあげる。女は発達した下半身をからませて、呪文のように言い続けた。

## 佐藤洋二郎（さとう・ようじろう）

1949年福岡生まれ。作家。日本大学芸術学部教授。中央大学卒業。25歳の時、『三田文學』にはじめての小説「湿地」を投稿し掲載され作家の道へ。外国人労働者をはじめて文学に取り入れた『河口へ』（集英社）で注目され、人間の生きる哀しみと孤独をテーマに作品を発表。『神名火』（小学館文庫）、『坂物語』（講談社）、『忍土』（幻戯書房）、『妻籠め』（小学館）など多数。『夏至祭』第17回野間文芸新人賞、『岬の蛭』第49回芸術選奨新人賞、『イギリス山』第5回木山捷平文学賞。現在、日本文藝家協会常務理事、日本近代文学館常務理事、日中文化交流協会常任理事、舟橋聖一文学賞選考委員、日大文芸賞選考委員、「季刊文科」編集委員など。

## 佐藤洋二郎小説選集一「待ち針」

---

2019年8月30日 初版第1刷印刷

2019年9月1日 初版第1刷発行

著者 佐藤洋二郎

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル2F

TEL: 03-3264-5254 FAX: 03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266

装幀／奥定泰之

印刷・製本／中央精版印刷

組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1821-4 © Youjiro Sato 2019, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。